

現代青年の自立性に関する研究 (2)

— 交流分析における自我状態と自立性 —

A Study on Independence of Modern Adolescents (2) : The Ego-State on Transactional Analysis and Independence

菱田 陽子*¹ 野口 喜美代*² 金子 劭 榮*³

要旨

菱田ら (2010) による自立性尺度と TEG II による自立・自律型と考えられるエゴグラム類型との関係から、青年の自立の様相を明かにすることを目的とし、質問紙による調査・分析を行った。想定した自立・自律型類型 (NP 優位型、FC 優位型等 6 類型) の、自立性因子 (影響受けやすさ、独自性、対人協調等 7 因子) との予想された関係が認められたが、特に注目した他者依存因子との関係は認められず、課題として残された。

キーワード：現代青年 (学生) / 自立性尺度 / 交流分析 / 自我状態

I 問題

筆者らは、先の研究 (菱田ら、2010) において、青年の自立性を測る尺度作りを目的として、大学生・短大生・専門学校生を対象に調査、分析を行い、一定の妥当性の検証を行った。

本研究では、この自立性尺度と交流分析で示される自我状態との関わりを検証しつつ、青年期にある大学生の自立性の様相を呈示したいと考えている。

自立性の定義については先行研究でも様々に行われているが、本研究では、筆者等の先の研究の定義を引き続き定義とし、先の研究の自立性尺度で測定する自立性と、交流分析のエゴグラムが示す自立性 (交流分析では、セルフコントロール、つまり自律性とされているが) との関係を分析・検討したい。

本研究における自立とは、菱田ら (2010) で考

えた「他者との関係を保ちながら、自らの考え方や行動の仕方に関して、他者の考え方や行動を参照することはあっても、他者からの明確な独立性を確保し、自らのもつ内的基準に照らして吟味し、自ら選択・決定する傾向であり、自分の力で、自らの責任を自覚しながら、考え、判断し、行動することが出来ることをいう。その際、自ら必要な支援を求めることを含む」とする。自立は多様な側面を含んでおり、社会性のある適応した生き方のみが発立ではなく、芸術家や作家に見られるようなある意味では社会と適応しないような強い個性を示す独自性や、忍耐し、相手にあわせることで関係性を保つなども自らを支えつつ生きる、という意味では自立と考えられが、我々の自立性尺度が測定している自立は、適応と適切な依存を含む望ましい自立の面を測定する尺度とした。望ましい自立には、適応と自律性、セルフ・コントロールが含まれていると考えられる。

交流分析のエゴグラムは、指紋のように、同じパターンは出現しない、とデュセイ (1980) が述べているように、限りのないパターンが存在する。東京大学医学部診療内科 TEG 研究会 (2006) (以下「TEG 研究会」と略記する) では、多くの

*¹ HISHIDA, Yoko
北陸学院大学短期大学部 コミュニティ文化学科
青年の心理

*² NOGUCHI, Kimiyo
NPO 日本交流分析協会北陸支部

*³ KANEKO, Shohei
北陸学院大学 非常勤講師

エゴグラムを採っている実績をもとに29パターンに類型化しているが、ここでは、その類型を基本として青年の自立パターンを想定し、分析しようとしている。以下、CP、NP、A、FC、ACの5つの自我状態の解釈はTEG研究会による。

青年期の自立、特に大学生の自立を考える場合、より成熟した社会人と比較し、彼らの環境からその自立面の未熟さが推測される。

本研究では、交流分析のエゴグラムとの関連をみようとしている。エゴグラムの創案者であるデュセイ(1980)は、エゴグラムについて、エネルギーがまったく無い領域、例えばAが0であるようなエゴグラムの場合は、確かにその人は不幸であるし、1つの領域が非常に優勢で、他の面を不均衡な形で支配している場合は、ゆがんだパーソナリティであると述べている。更に望ましい形のエゴグラムとして「A」が最も高く、「NP」「FC」が側面に適度に高く、「CP」「AC」が低い緩やかな山型(デュセイはベル型と言っているが)と「CP」「NP」「A」「FC」「AC」がほぼ同じような高さを示す平坦型の2つの型をあげている。但し、この2つの型のうち、緩やかな山型は、調査対象の学生の論理的、客観的に判断する「A」の低さが想定されることもあり、このエゴグラムを示す青年は少ないと考えられる。青年の自立性は、大人の自立性に比べ、その成長段階、彼らの環境、実際に生きている経験の少なさ等からまだ未熟であると考えられる。このことを加味し、ここでは、「大人の自立」に向かっている心性も青年の自立性に加えて検討したい。

それらを考慮に入れ、現代青年、主に大学生の自立・自律パターンを想定すると、①他者肯定の構えの「NP」の高いNP優位型、②論理的、客観的に判断する「A」の高いA優位型、③感情や欲求を自由に表現する自己肯定感の構えの「FC」の高いFC優位型、④論理的、客観的に判断する「A」が十分に高くはなく、親切で寛容的、他者肯定の構えの「NP」と感情や欲求を自由に表現する自己肯定感の構えの「FC」の高いM型、⑤デュセイの標準型である平坦型(本研究では、平坦型I-高、平坦型II-中の2パターン)の6パターンを現代青年の自立・自律型と想定し、自立尺度との関係を検証することにより、自立性尺

度とエゴグラムの関係に関する予測の実証を試みたい。

菱田ら(2010)は、自立の中心に、「適切な依存」を含む「対人協調」と「独自性」を考えたが、「対人協調」に関する項目として、思いやりや相手配慮を想定しているものの、適切な依存と甘えを区別した把握が極めて困難であり、項目の検討を十分にすることができなかった。

自立尺度の「対人協調」は「周りの人とよい関係を維持することができる」、「他人の気持ちを思いやることができる」面であり、相手配慮の優しさと、相手に従う従順さによると考えられる。このことから、「対人協調」は、相手配慮の優しさや他者肯定の構えの「NP」の自我状態と、周囲に適応していく従順でありながら、自己否定の構えの「AC」の関与が想定される。この「AC」の自我状態は「従順で他人に依存し、感化されやすい(TEG研究会)」とされているように依存と関わりがある自我状態でもある。適切な依存も依存に関わる自我状態が関与すると考えられることから、「AC」との関わりに注目しつつ、適切な依存とエゴグラムパターンの関連も示したい。本研究では、この目的のために、適切な依存を測ることを目指した項目を、先の自立性尺度項目に加えている。因子分析により、これらの項目が適切な依存因子として、確認されることも期待したい。

ここでTEGにおける青年の自立・自律型と想定している6つのパターン、M型、NP優位型、FC優位型、A優位型、平坦型I-高、平坦型II-中は、いずれも「AC」が高くはない。非自立性に関わる自我状態「AC」に注目しつつ、青年の自立・自律型について検討したい。

「独自性」について、筆者等は、自立性はその人らしく個性を生かした生き方を支えると考えており、その人らしい個性を「独自性」と捉えているが、「独自性」のもつ側面として、自分の意見の主張なども含まれると思われる。TEGにおいて、感情や欲求を自由に表現する自己肯定感の構えの「FC」は心の元気さの指数とも考えられており、「独自性」と関わりと予測されるが、FC優位型は、未成熟な幼児性としてわがまま、腰の軽さと風評される面ももっているため、ここで測ったFC優位型と各自立因子の関係の現れ方によっ

ては、自立・自律型には不適切である結果になることも考えられる。しかしながら、ここに青年の自立・自律型としてFC優位型を加えたのは、筆者らの学生指導の現場において、明るく楽しく生きている学生が授業や就職活動の問題、友人との人間関係の解決を測る力が強いことを感じていることが挙げられる。つまり、自立性のエネルギーの基本は「FC」のエネルギーの高さではないか、と考えており、交流分析理論として、セルフコントロールがなされている自立・自律型に向かうには、「FC」の自己状態を上げることが、その方法の1つであるとされていることもFC優位型を青年の自立型の1つに加えた理由である。

青年、主に学生の自立・自律型を想定する際、自己の判断を正しいものとして譲らず、批判・非難し、基本的には他者否定の構えの「CP」と、親の躰、教育の影響を受け、周囲に適応していく従順でありながら、自己否定の構えの「AC」が高いパターンは除外した。自己否定・他者否定の構えは、望ましい自立性を阻害すると考えている。自分にも他人にも厳しく、自分の価値観を相手に押しつけるとされる「CP」の自己状態は、協調性のある望ましい自立性を阻害するであろうし、他人の言うことに左右され、主体性に欠け、すねたり、ひねくれたりする偽りの反抗を示すとされる「AC」の自己状態は自分の気持ちを隠し、幼稚な忍耐や怒りとなることもあり、自分らしく生きる望ましい自立を阻害するであろう。

以上の予測をもとに調査・分析し予測の立証を試みる。

II 目的

本研究の目的は、菱田ら(2010)で作成した自立性尺度と自己状態の関係から、現代青年の自立性の様相を明らかにすることである。

具体的には、それぞれの自己状態(CP, NP, A, FC, AC)にもとづく青年の自立傾向を示す、と我々が想定したM型、NP優位型、FC優位型、A優位型、平坦型Ⅰ-高、平坦型Ⅱ-中と、自立性7因子との関係を明らかにする。

即ち、これら自立傾向を想定した類型を示す者は、適応した自立傾向を示すと考えられ、自立性因子については、他の類型を示す者よりも、将来

展望が明確で、影響受けにくく、独自性が強く、感情統制がうまく、自立認識が確かで、対人協調が優れており、他者依存が出来るであろうと考え、これを確認することを目的とする。

また、自立傾向を示すと想定した類型間では、それぞれの特色を示す自立性因子との関係があると予測される。

III 方法

調査対象及び調査実施時期

4年制大学生、短期大学生、専門学校生503名を対象とした質問紙調査を実施し、無回答項目が極端に多いなど、明らかに不適切な回答をされた者を除き、496名(4年制大学生141名 内男性61名、女性78名、性別不明2名、短期大学生305名 内男性11名、女性294名、専門学校生50名 全て女性)、平均年齢18.96歳、標準偏差1.05歳である。

エゴグラムについては、回答漏れを除き485名を分析対象とした。

調査実施は2010年7月。

調査内容

菱田ら(2010)の27項目に、新たに「影響受けやすさ」と思われる3項目と、「適切な依存」と思われる項目6項目を作成追加し、計36項目(4件法)からなる項目を自立性尺度として使用した。これとは別に、先の調査で作成した不適切回答点検のための16項目を表現を含め再検討し、14項目(4件法)を順不同で配置した。更にエゴグラムをみるために新版TEGⅡの53質問(3件法)を使用した。なおフェースシートとして、性別、学年、年齢を尋ねている。

調査方法

各大学の授業中に、それぞれ授業担当者が、作成された実施手引きに従って実施した。

IV 結果と考察

回答の有効性

先の場合と同様、質問によって得られた回答の不適切な者は、分析対象から除外している。なお、この確認のための項目の一部は菱田ら(2010)と異なるものを採用している。

TEGについては、回答の有効性をみるための、

L尺度とQ尺度が設けられている。L尺度では、該当項目の合計が3点以上、Q尺度については、「どちらでもない」を選んだ項目合計が32点以上の者は判断を保留した方がよい、とされているが、本研究では、全員を対象としている。

自立性尺度の検討

(1) 自立尺度の因子構造

菱田ら(2010)を再検討した自立性尺度項目36項目をこれまでと同様に、最尤法による因子の抽出、プロマックス法による軸の回転を行い、回転後、いずれの因子についても負荷量の小さい項目を削除し、最終解として、7因子解が得られた。それらの因子は、「自分の将来のことをよく考えている」、「将来何をしたいのかについて考えをもっている」等からなる「将来展望」因子、「周りの人の意見に流されやすい」、「簡単に周囲の人の影響を受けてしまう」等からなる「影響受けやすさ」因子、「他人と違っていても、私自身の考

え方が大切だ」、「自分ならではの好みや考え方がある」等からなる「独自性」因子、「状況にあわせて感情をコントロールすることができる」、「悲しみ、怒りなどの感情を自分で落ち着かせることができる」等からなる「感情統制」因子、「家から自立するには何が大切かを知っている」等からなる「自立認識」因子、「他人の気持ちを思いやることができる」、「周りの人と協力して物事に取り組むことができる」等からなる「対人協調」因子、「自分ではどうにもならない深刻なときに、人に頼るのは当然だ」等からなる「他者依存」因子、の7因子であった(Table 1)。

各因子の下位尺度を考え、その内的整合性を示すChronbachの α 係数を求めたところ、将来展望 $\alpha = .87$ 、影響受けやすさ $\alpha = .78$ 、独自性 $\alpha = .70$ 、感情統制 $\alpha = .70$ 、自立の認識 $\alpha = .75$ 、対人協調 $\alpha = .68$ 、他者依存 $\alpha = .55$ であり、「他者依存」以外の6因子については一応の信頼性を確認できたが、「他者依存」については、検討の必要がある。本研究では、

Table 1 自立性の因子構造 (最尤法、プロマックス回転)

項 目	I	II	III	IV	V	VI	VII
5. 自分が将来何をしたいのかについて考えをもっている	.905	.016	.009	-.103	-.009	.027	-.007
39. 将来の目標がなかなか定まらない	-.833	.049	.019	.092	.101	.009	-.020
32. 自分の将来のことをよく考えている	.749	.041	.040	.025	.092	.031	-.044
22. 将来に対する見通しや考えをもって生活している	.710	.028	.015	.175	.000	-.041	-.029
17. 周りの人の意見に流されやすい	-.009	.888	-.026	.064	-.014	-.042	-.038
8. 簡単に周囲の人の影響を受けてしまう	.028	.843	.098	.077	-.031	-.038	.022
1. 相手の意見にすぐ納得してしまう	.023	.531	-.221	-.018	.069	.118	-.016
31. 友だちと議論していると、相手の方が正しいと思ってしまう	.035	.477	-.236	-.041	.073	.012	-.043
16. 行事のときなど、自分からは何もしないことが多い	-.178	.420	.096	.052	.033	-.255	-.036
28. 友だちに頼りすぎる傾向がある	.021	.373	-.045	-.227	-.014	-.007	.265
30. 自分ならではの好みや考え方がある	.010	-.013	.621	-.190	.049	.086	-.036
42. 他人と違っていても、私自身の考え方は大切だ	.022	-.032	.611	-.004	.036	-.024	.034
47. 自分なりの価値判断の基準を持っている	-.032	-.026	.584	.051	.036	-.017	.064
26. 多少トラブルがあっても、人と違った自分の考え方を大切にすべきだと思う	.001	.012	.477	.072	-.061	.007	-.100
14. 他の人が何か言っても、自分の意見が変わらないことが多い	-.031	-.288	.425	-.022	.036	-.158	.002
7. これまでにはこだわらず、自分が良いと思ったことをしている	.111	-.025	.344	.068	-.122	.104	.123
25. 悲しみ、怒りなどの感情を自分で落ち着かせることができる	-.089	.094	.006	.661	-.035	.173	-.029
49. 状況にあわせて感情をコントロールすることができない	.000	-.016	.007	-.641	.087	-.096	-.078
38. いつも落ち着いて行動できる	.020	.159	.169	.620	.002	-.013	-.009
36. つい感情にまかせて行動してしまう	.013	.122	.238	-.518	.096	.055	-.031
29. 失敗したときも、冷静に考えることができる	.030	-.159	.113	.365	.108	-.020	-.107
50. どうすれば経済的に自立できるか、よく分からない	-.152	.140	.114	-.337	-.308	.192	-.160
34. 家から自立するには何が大切かを知っている	.015	.070	-.019	-.051	.913	-.026	.019
4. 一人暮らしがうまくできるには何が必要か分かっている	-.052	-.063	-.012	-.108	.679	.069	.002
20. 精神的に自立するには何が必要かを知っている	-.017	.040	.054	.018	.605	.111	-.012
19. 他人の気持ちを思いやることができる	.021	-.001	.000	.010	.012	.674	-.151
13. 周りの人とよい関係を維持することができる	-.007	-.001	.129	.017	-.015	.544	.222
3. 周りの人と協力して物事に取り組むことができる	.036	-.019	-.088	.071	.014	.525	.083
24. 相手の気持ちを察して、適切な対応ができる	-.058	-.062	.030	.099	.179	.513	-.055
12. 自分ではどうにもならない深刻なときに、人に頼るのは当然だ	-.086	.038	.075	.002	-.003	.019	.680
43. 自分ではどうにもならないのに、他人に助けを求められない	.025	.130	.150	-.048	-.020	.000	-.608
37. 親は、いざとなれば私を助けてくれる	.095	.136	.140	.018	.024	-.043	.366
因子間相関							
将来展望		-.251	.155	.244	.336	.209	.140
影響受けやすさ	-.251		-.411	-.368	-.302	.064	.176
独自性	.155	-.411		.176	.284	.139	.069
感情統制	.244	-.368	.176		.402	.267	-.079
自立認識	.336	-.302	.284	.402		.318	.004
対人協調	.209	.064	.139	.267	.318		.259
他者依存	.140	.176	.069	-.079	.004	.259	

自立に関わる適切な依存性の検討をし、項目を考えたが、甘えと依存の検討に関わる項目が不足していることもあり、今後の検討課題である。

TEG 類型と自立性の関係

(1) TEG エゴグラム類型化

485 名のエゴグラムを TEG を専門として学び類型化できる者 2 名で、それぞれに類型化し、その結果を合わせたところ、その一致率は 85.36% であり、一致しなかった 14.64% については、両者の協議によって型を決めた。類型化に使用したパターンは、TEG 研究会の 29 類型を採用し、類型化に使用したパターンの名称については、Table 2 における優位型及び低位型の型名は TEG 研究会の使用名と同じであるが、混合型については TEG 研究会使用名の後にハイフオンをつけ、その右側に類型の特徴を示す自我状態の記号を並べている。表中の、混合型の、台形型、U 型 (①~⑩) については、高い自我状態の記号を並べている。例えば、「台形型 I-NP・A・FC」は NP、A、FC の各自我状態が他の自我状態即ち CP 及び AC の自我状態よりも高いことを示している。

表中⑪から⑳の混合型については、自我状態の記号を 2 個並べて示しているが、N 型は、左側にエゴグラムのより左側の高い自我状態の記号を、右側にはより右側の低い自我状態の記号を並べて

いる。例えば、「N 型 I-NP・A」は NP と AC が同程度に高いエゴグラムであるが、より左側の高い自我状態である NP と、同程度に低い CP と A のより右側の A の自我状態の記号を並べている。さらに逆 N 型は、左側にエゴグラムのより右側の高い自我状態の記号を、右側にはより左側の低い自我状態の記号を並べている。例えば、「逆 N I-A・NP」は CP と A が同程度に高いエゴグラムであるが、より右側の高い自我状態である A と、同程度に低い NP と AC のより左側の低い自我状態である NP の記号を並べている。

表中の㉔から㉖の平坦型については、その高さによって高い順に高、中、低と示している。この他、29 類型に該当しない分類不能のエゴグラムを「その他」としている。

ここで類型化した者は 485 名であるが、自立性尺度測定で、回答の有効性の検討の結果調査対象としなかった者、及び TEG 質問項目に回答漏れのあった者を除き、453 名の類型を対象としている (Table 2)。

該当標本数がごく少数であるために、分析に適さないパターンを除き、まず 10 人以上の 13 類型を対象と考え、これにデュセイが「望ましいエゴグラム」と述べている平坦型 I-高と A 優位型を加え、15 類型をここでの分析対象とした。A 優位型については、ここでの標本が、顕著な A 優位というより、山型に近い A 優位型を示したことにより、また平坦型 I-高も、自立・自律パターンとしては想定しやすい型であるため、自立類型として分析対象とし、ここに含めることにした。

すなわち、具体的なパターンは、NP 優位型 (25)、A 優位型 (7)、FC 優位型 (27)、AC 優位型 (73)、NP 低位型 (12)、A 低位型 (29)、FC 低位型 (20)、N 型 I-NP・A (25)、N 型 II-NP・FC (21)、N 型 III-A・FC (18)、逆 N II 型-FC・NP (12)、M 型 (23)、W 型 (19)、平坦型 I-高 (7)、平坦型 II-中 (79) の 15 パターンである。() 内数字は該当標本数を示す。

(2) 青年の自立型エゴグラムパターンと非自立型パターンの想定

現代青年、主に大学生の自立・自律型エゴグラムパターンを、先に述べたように NP 優位型、A

Table 2 TEG 類型化

パターン	人数	パターン	人数
優位型		混合型	
①CP 優位型	9	㉗N 型 I-NP・A	25
②NP 優位型	25	㉘N 型 II-NP・FC	21
③A 優位型	7	㉙N 型 III-A・FC	18
④FC 優位型	27	㉚逆 N 型 I-A・NP	9
⑤AC 優位型	73	㉛逆 N 型 II-FC・NP	12
低位型		㉜逆 N 型 III-FC・A	4
⑥CP 低位型	6	㉝M 型	23
⑦NP 低位型	12	㉞W 型	19
⑧A 低位型	29	㉟平坦型 I-高	7
⑨FC 低位型	20	㊱平坦型 II-中	79
⑩AC 低位型	2	㊲平坦型 III-低	5
混合型		㊳P 優位型	3
⑪台形型 I-NP・A・FC	0	㊴C 優位型	5
⑫台形型 II-NP・A	0	㊵その他	7
⑬台形型 III-A・FC	0		
⑭U 型 I-CP・AC	0		
⑮U 型 II-CP・FC・AC	4		
⑯U 型 III-CP・NP・AC	2		

計 453

優位型、FC優位型、M型、平坦型Ⅰ-高、平坦型Ⅱ-中と想定した。

これらの自我状態を青年の自立型と想定したのは、TEG研究会の各自我状態と各パターンの定義による (Table 3)。

検討パターンの内、残りの9パターンは、TEG研究会により、非自立・非自律型と想定した (Table 4)

(3) TEG 類型と自立性因子の関係

先にもふれたように、一般成人の自律・自立性に比較すればまだ未熟な現代青年であるが、彼らの現状から考えて、相対的に自立的であると思われる類型として先の6類型を考え、それ以外の類型は非自立型と考えた。これらの自立型と考えられる TEG 類型を示す者の特徴を知るために、我々の自立性尺度因子についての因子得点平均値を示

した (Table 5)。

上に挙げた類型 (Table 3) が自立傾向を示すすれば、我々の自立性尺度についても、影響受けやすさは低く、独自性は高く、感情統制は高く、自立認識が高く、将来展望は明確であり、自立が単なる他者からの分離ではないと考え、対人協調が高く、適切な他者依存性が高い傾向を示すであろう。

ここでは平均値から 1/2 標準偏差以上隔たった因子得点を示すもの (Table 5 で太字で示している) に注目した。自立・自律型と考えられる類型について、「AC 優位型」を典型とする非自立・自律類型との相違に注目しながらみると、以下のような傾向が認められる。

まず「影響受けやすさ」について、「平坦型Ⅰ (高水準)」がこれに当てはまらないものの、多くの自立・自律型と思われる類型で、低い傾向が認

Table 3 青年の自立・自律型と想定根拠

青年の自立・自律型		想定根拠
NP優位型	人に優しく温かく接する、人の気持ちを理解する、世話をやくという特徴を示し、面倒見のよいタイプ。自分を犠牲にしてまで、他者に尽くすことはしない	ゆるやかではないが山型を示すことから、デュセイの「望ましい型」である「ゆるやかな山型」に準拠する。優しい他者配慮は成熟性・大人の側面であり 社会性・対人関係に関すると考えられ、自立性の「対人協調」因子を中心とした自立・自律型を想定している。
A優位型	論理的、知的で計画的な行動が多く、仕事を進める上では有能。理屈っぽく、冷たい、何事も計算づくという非難を浴びることもあるタイプ	ゆるやかではないが山型を示すことから、デュセイの「望ましい型」である「ゆるやかな山型」に準拠する。考える力、判断力のある成熟性は、自立性の「自立認識」因子を中心とした自立・自律型を想定している。
FC優位型	自由で陽気にはしゃぐ好奇心旺盛なタイプ、但し周りへの気づかいが少ないので、わがままと思われる	この型はデュセイの「望ましい型」には、セルフ・コントロール型とは説明されておらず、本研究で独自に考えている。学生と接する現場で、FCの高い学生は元気があり、エネルギーな印象をもつこと、感情や欲求を自由に表現する自己肯定感の構えの「FC」のエネルギーは心の元気さ指数でもあり、冷静に問題解決を図ることに欠けていても「FC」の元気さで、人間関係、就職活動などの問題を明るく元気に乗り越えていき、楽しく生きていると予測されることなどを根拠に、自立性の「独自性」因子を中心とした自立・自律型を想定している。
M 型	「NP」と「FC」が同程度に高く、「CP」「A」と「AC」が相対的に低いものである。陽気にはしゃぎ、自分も楽しみ、世話好きでもあり、好感をもたれることも多いタイプ	青年期には、「A」の発達が未熟な傾向もみられ、成熟に向かって「A」が高くなれば、デュセイの言う「望ましい型」であるゆるやかな山型となる可能性も高い。「NP」と「FC」が同程度に高いことから、自立性の「対人協調」因子、「独自性」因子を中心とした自立・自律型を想定している。
平坦型Ⅰ-高	5尺度全てが同程度の高いもので、あらゆる面において心的エネルギーが高い。生活は、意欲的、かつ活動的。	上部が平らで全ての自我状態を同じ量もっている、デュセイの言う「望ましい型」であり、自立因子全てをもつ自立・自律型と想定している。
平坦型Ⅱ-中	5尺度全てが中程度のもので、あらゆる面において平均的で中庸であるが、やや個性に欠けて面白くないタイプ	面白みはなくても、平均的な中庸さはデュセイの言う「望ましい型」であることから、セルフ・コントロールがなされているパターンであり、いずれの自立性因子とも関わりのある自立・自律型と想定している。

められる。

「独自性」についても、「FC 優位型」等で高い傾向が認められ、「感情統制」についても高い傾向が認められる（「NP 優位型」、「A 優位型」で顕著）。「自立認識」についても高い傾向が認められている（「NP 優位型」、「A 優位型」、「平坦型 I（高水準）」で顕著）。他方、「対人協調」については、「A 優位型」では当てはまるとは言えないが、高い関係性を示す類型が多い。我々が注目したいと考え

ている適切な他者への依存傾向を目指した「他者依存」については、「A 優位型」以外殆ど関係は認められなかった。「A 優位型」との関係も、想定している適切に依存する傾向ではなく、他者を頼らず、依存しない傾向を示している。

視点を交えて、各自立・自律型類型の特徴を自立性因子との関係から個別にみると、NP 優位型（他者肯定の構えの「NP」が高い）は「人に優しく温かく接し、面倒見はよいが自分を犠牲にして

Table 4 青年の非自立・非自律型と想定根拠

青年の非自立・自律型		想定根拠
AC優位型	「人に気づかひして「No」と言えない」、「自分で先頭に立って何かを成し遂げるというのは不得手」「デュセイは「依存者」と呼び、依存的で（自分では）なにも考えていないタイプ	この型の特性から最も非自立・自律型と想定
低位型 NP低位型 A低位型 FC低位型	「5尺度のうちで1つの尺度だけが低い場合」であり、「その尺度の自我状態が抑制されている」と考え、「その尺度以外の複数の高い自我機能が優勢に発揮される」タイプ NP低位型は「人に優しくない、人の世話はやきたくない反面、人に対しては厳しいので、攻撃的」、「デュセイは「かんしゃくもち」と名づけ、依存欲求が満たされないと大声で抗議し、思いやりがない」タイプ A低位型は「あまり理論的、知性的ではなく、現実認識ができていない。」、「CP、ACが高いと問題解決が難しく、葛藤状態に陥る」タイプ FC低位型は「自由にはしゃぐことができず、ネクラの人」、「CPとACが高いと自己実現できずに、耐えながら葛藤だけをためていく」、「デュセイはがんこで厳格で自分は楽しまない」タイプと述べている	これらの特性は筆者らが考えている個性豊かに自分らしく生き、社会とも適応していくパターンがもつ特性とは相反していると考えられ、非自立・自律型と想定
N型Ⅰ-NP・A N型Ⅱ-NP・FC N型Ⅲ-A・FC	親の嫉、教育の影響を受け、周囲に適応していく従順でありながら、自己否定の構えの「AC」が高く、感情や欲求を自由に表現する自己肯定感の構えの「FC」が低いことで、自分らしく独自性をもつ構えのないパターンであることから、非自立・自律型と考えた。 N型Ⅰ-NPAは「NP」「AC」が同程度に高く、「CP」「A」が相対的に低い、「他人に「いいえ」と言えないで利用されたり、要求以上に与えてしまう」タイプ N型Ⅱ-NPFCは「NP」「AC」が同程度に高く、「CP」「FC」が相対的に低い、「滅私奉公する傾向があり、施し上手ではあるが、自分は楽しまない」タイプ N型Ⅲ-AFCは「A」と「AC」が同程度に高く、「CP」「FC」が相対的に低い、「仕事は有能にこなすが、自分を楽しむことをしない」、「デュセイは「働き者」と名づけ、イエス・マン」としているタイプ	いずれも筆者らの自立の定義に沿わないパターンである
逆N型Ⅱ -FCNP	「CP」「FC」が同程度に高く、「NP」「AC」が相対的に低い、「特徴は「FC」の高さにあり、人に厳しく自分に甘い自己中心的」、「思いやりのなさを特徴」とするタイプ	筆者らの自立の定義に沿わないパターンである
W型	「CP」「A」「AC」が同程度に高く「NP」「FC」が相対的に低い、「義務感、責任感、批判精神は高く、周囲への気づかひも強い」、しかし「自己主張はできないので、葛藤をため込む」「自己否定型のあまり望ましくないパターンのひとつ。デュセイは「自殺者」と名づけ、怒りが自分に向けて計画的に自己破壊に向かうと述べている	この型の特性から最も非自立・自律型と想定

Table 5 TEG 類型別自立性因子得点

		将来展望	影響受けやすさ	独自性	感情統制	自立認識	対人協調	他者依存
NP優位型	24	.296	-.385	.158	.507	.516	.604	.003
A優位型	7	.556	-1.039	.209	.543	.630	-.388	-.707
FC優位型	26	.208	-.520	.527	.276	.320	.120	.158
AC優位型	70	-.322	.966	-.653	-.657	-.458	-.213	.014
NP低位型	12	.095	.153	.477	-.302	-.171	-.463	.262
A低位型	28	-.068	.255	-.063	-.289	-.326	.171	.311
FC低位型	20	-.095	.213	-.536	-.130	-.143	-.400	-.508
N型Ⅰ－NP・A	25	-.075	.410	-.352	.162	-.224	.260	.040
N型Ⅱ－NP・FC	21	-.179	.620	-.230	.245	.159	.283	-.114
N型Ⅲ－A・FC	17	-.587	.159	-.277	.131	-.240	-.569	-.363
逆N型Ⅱ FC・NP	11	-.049	-.967	.777	-.140	-.302	-.262	.298
M型	23	.036	-.479	.461	.229	.337	.675	.198
W型	19	-.111	-.402	.312	-.289	-.138	-.770	-.462
平坦型Ⅰ－高	7	.459	.379	.282	.307	.704	1.066	.356
平坦型Ⅱ－中	76	.163	-.244	.018	.179	.149	.119	.082

まで、他人に尽くすことはしない (TEG 研究会) タイプであり、感情統制ができて、自立認識をもち、特に対人協調に長けている自立・自律型であることを示している。

A 優位型 (論理的、客観的に判断する「A」が高い) は「論理的知的で計画的な行動が多く、理屈っぽい (TEG 研究会)」タイプであり、7つの自立因子中5因子との関係を示した。自立尺度で測る自立性の特徴を最も多く持ち合わせた自立・自律型類型である。ただし、標本数が少ないため、この関係を引き続きみていく必要があるが、人からの影響を受けることは少なく、感情統制ができて、考える力があることから将来展望・自立認識を持ち、他者に頼らない自立・自律型である。

FC 優位型 (感情や欲求を自由に表現する自己肯定感の構えの「FC」が高い) は「自由で陽気、好奇心旺盛であるが、周りへの気づかいが少ない (TEG 研究会)」タイプであり、人からの影響を受けず、独自性のある自立・自律型である。

M 型 (他者肯定の構えの「NP」と感情や欲求を自由に表現する自己肯定感の構えの「FC」が高く、自己の判断を正しいものとして譲らず、批判・非難し、基本的には他者否定の構えの「CP」、論理的、客観的に判断する「A」、親の躰、教育の影響を受け、周囲に適応していく従順でありながら、自己否定の構えの「AC」が低い) は「陽気にはしゃぎ、自分も楽しみ、世話好きで好感をもたれる (TEG 研究会)」タイプであり、7つの

自立因子中「対人協調」とのみに特徴を示した。自立因子との関係を多く見いだせなかったが、周囲の人や社会と、楽しみながら生きている自立・自律型である。

平坦型－高 (高水準) は、5つの自我状態が全て高く、均等に持っているタイプであり、「5尺度全てが同程度の高いもので、あらゆる面において心的エネルギーが高い。生活は、意欲的、かつ活動的 (TEG 研究会)」タイプであり、自立認識をもち、対人協調の長けている自立・自律型である。

なお、類型「A 優位型」、「平坦型Ⅱ (中水準)」についてはその標本数が極めて少ないため、ここで示された特徴は控え目に見る必要がある。

以上のような特徴が明らかになったが、確かに、ここで非自立類型であると考えている「AC 優位型」では、上述の自立・自律型の類型と逆傾向を示しており、自立・自律型の類型の特徴がそれなりに明らかになっているが、他方、非自立型と考えられる「逆N型Ⅱ (FC・NP)」については、人からの影響を受けにくいこと、独自性が強いこと等、自立・自律型であると思われる類型と類似した傾向を示しており、我々が非自立・自律型と想定したことに問題があることを窺わせる。この型は、「CP」「FC」が同程度に高く、「NP」「AC」が相対的に低い。特徴は「FC」の高さにあり、「人に厳しく自分に甘い自己中心的、思いやりのなさを特徴とするタイプ」(TEG 研究会) とされ、他

者との関係を保ちながら自らの責任を自覚しつつ自分らしく生きる自立・自律型ではないと考えられる。このことから、非自立・非自律型と想定したが、FC優位型を青年の自立・自律型と想定したように(FCの高さは独自性が強い傾向であること)、自立・自律型と想定すべきであったとも考えられる。このタイプは、自己の判断を正しいものとして譲らず、批判・非難し、基本的には他者否定の構えの「CP」が強い型であり、規制・規範意識が強く、優柔不断ではなく、他者からの影響を受けることは少ないタイプであることから「影響うけやすさ」では低い数値を示したものと考えられる。この結果はこのタイプの特徴がよく示されているが、自立・自律型の類型を想定する際の我々の肯定的な自立の定義とは、「自己の判断を正しいものとして譲らず、批判・非難し、基

本的には他者否定の構え」の「CP」が高い、という点で異なっている。このことは我々の自立の定義に沿って、TEGの類型化をすることが必ずしも容易ではないことを示している。これについてはその理由等を中心に、今後更に検討する必要がある。

また、これら自立・自律類型と考えられるものと非自立・非自律類型と考えられるものとの相違について、更に詳細な自立性因子の差を明らかにすることが必要である。更に、これらの自立・自律類型として考えたものも、類型としては異なるものであることから、同じ自立・自律類型でも自立性因子について相違している可能性があるもので、これにも注目しなければならない。

これらのことを明らかにするために、各類型間の自立性因子について、差を確認するための一要

Table 6-1 類型間の因子得点差の有意水準(独自性因子)

	NP優位型	A優位型	FC優位型	AC優位型	NP低位型	A低位型	FC低位型	N型I NP・A	N型II NP・FC	N型III A・FC	逆N型II FC・NP	M型	W型	平坦型I 平均以上	平坦型II 平均
NP優位型		1.00	.93	.00	1.00	1.00	.16	.56	.93	.90	.64	.99	1.00	1.00	1.00
A優位型	1.00		1.00	.22	1.00	1.00	.65	.93	.99	.99	.97	1.00	1.00	1.00	1.00
FC優位型	.93	1.00		.00	1.00	.23	.00	.00	.05	.06	1.00	1.00	1.00	1.00	.18
AC優位型	.00	.22	.00		.00	.04	1.00	.93	.64	.89	.00	.00	.00	.12	.00
NP低位型	1.00	1.00	1.00	.00		.77	.02	.12	.40	.36	1.00	1.00	1.00	1.00	.83
A低位型	1.00	1.00	.23	.04	.77		.72	.99	1.00	1.00	.12	.49	.94	1.00	1.00
FC低位型	.16	.65	.00	1.00	.02	.72		1.00	.99	1.00	.00	.00	.04	.49	.20
N型I NP・A	.56	.93	.00	.93	.12	.99	1.00		1.00	1.00	.00	.02	.22	.83	.73
N型II NP・FC	.93	.99	.05	.64	.40	1.00	.99	1.00		1.00	.03	.16	.63	.97	.99
N型III A・FC	.90	.99	.06	.89	.36	1.00	1.00	1.00	1.00		.03	.15	.58	.95	.98
逆N型II FC・NP	.64	.97	1.00	.00	1.00	.12	.00	.00	.03	.03		1.00	.96	.99	.13
M型	.99	1.00	1.00	.00	1.00	.49	.00	.02	.16	.15	1.00		1.00	1.00	.49
W型	1.00	1.00	1.00	.00	1.00	.94	.04	.22	.63	.58	.96	1.00		1.00	.98
平坦型I 高	1.00	1.00	1.00	.12	1.00	1.00	.49	.83	.97	.95	.99	1.00	1.00		1.00
平坦型II 中	1.00	1.00	.18	.00	.83	1.00	.20	.73	.99	.98	.13	.49	.98	1.00	

* <.05

Table 6-2 類型間の因子得点差の有意水準(対人協調因子)

	NP優位型	A優位型	FC優位型	AC優位型	NP低位型	A低位型	FC低位型	N型I NP・A	N型II NP・FC	N型III A・FC	逆N型II FC・NP	M型	W型	平坦型I 平均以上	平坦型II 平均
NP優位型		.20	.70	.00	.01	.82	.00	.97	.99	.00	.16	1.00	.00	.99	.37
A優位型	.20		.98	1.00	1.00	.94	1.00	.85	.83	1.00	1.00	.12	1.00	.05	.95
FC優位型	.70	.98		.89	.73	1.00	.66	1.00	1.00	.26	.99	.48	.02	.25	1.00
AC優位型	.00	1.00	.89		1.00	.69	1.00	.40	.43	.94	1.00	.00	.30	.01	.42
NP低位型	.01	1.00	.73	1.00		.58	1.00	.38	.37	1.00	1.00	.01	1.00	.01	.54
A低位型	.82	.94	1.00	.69	.58		.47	1.00	1.00	.15	.97	.62	.01	.33	1.00
FC低位型	.00	1.00	.66	1.00	1.00	.47		.27	.28	1.00	1.00	.00	.98	.00	.37
N型I NP・A	.97	.85	1.00	.40	.38	1.00	.27		1.00	.07	.89	.89	.00	.53	1.00
N型II NP・FC	.99	.83	1.00	.43	.37	1.00	.28	1.00		.07	.88	.95	.00	.62	1.00
N型III A・FC	.00	1.00	.26	.94	1.00	.15	1.00	.07	.07		1.00	.00	1.00	.00	.09
逆N型II FC・NP	.16	1.00	.99	1.00	1.00	.97	1.00	.89	.88	1.00		.09	.94	.04	.98
M型	1.00	.12	.48	.00	.01	.62	.00	.89	.95	.00	.09		.00	1.00	.18
W型	.00	1.00	.02	.30	1.00	.01	.98	.00	.00	1.00	.94	.00		.00	.00
平坦型I 高	.99	.05	.25	.01	.01	.33	.00	.53	.62	.00	.04	1.00	.00		.15
平坦型II 中	.37	.95	1.00	.42	.54	1.00	.37	1.00	1.00	.09	.98	.18	.00	.15	

* <.05

因分散分析を行っている (Table 6-1、Table 6-2)。

それによれば、「影響受けやすさ」や「独自性」では、多くの類型間で差が認められるが、「将来展望」、「他者依存」、さらには「自立認識」では有意な差は殆ど認められなかった。我々は特に他者に対する適切な依存が、自立における重要な要素であると考えていたが、TEG 類型の相違に関しては殆ど関連が認められず、我々が測定した「他者依存」は TEG 類型の差に関連していないことが判明した。適切な他者依存の測定については、今後さらなる多角的検討が必要である。

これを含めて、まず差が認められない自立性因子について見ると、「他者依存」については自立・自律対非自立・非自律間の相違は全くない。「自立認識」については、非自立・非自律の典型と考えられる「AC 優位型」との差が認められ、先の平均値による特徴を確認する結果となった。言い換えれば、「AC 優位型」と自立・自律型類型との間では、「自立認識」の差が明確であることを示している。

「対人協調」については、「FC 優位型」、「A 優位型」、「平坦型 I (中水準)」を除いた自立・自律型類型と、多くの非自立・非自律型類型との間に相違が認められ、類型間の相違に対人協調が関連していることを窺わせる。但し、「FC 優位型」、「A 優位型」、「平坦型 I (中水準)」が関連しないことについては検討が必要である。

「感情統制」については、「感情統制」と NP 優位型、A 優位型それぞれとの間に相違が認められる。更に、AC 優位型と自立・自律型類型との間の相違が認められるが、一部の非自立・非自律型類型との間にも差がある。AC 優位型が、他に比較して感情統制が低い傾向を示している。

「独自性」は多くの類型間で相違が認められ、非自立・非自律型間でも相違が認められるが、「感情統制」と同様「AC 優位型」でも低い傾向を示し、他の類型との差が認められる。

「影響受けやすさ」は、多くの類型間で差が認められたが、やはり自立・自律型と非自立・非自律型との間の差が認められる。

非自立・非自律型の典型であると考えた「AC 優位型」は、感情統制が低く、影響受けやすく、独自性が低いという特徴を持つことが確認され

た。

以上とは別の視点で、自立・自律類型内でここで測定した自立性因子について相違があるかを確認したが、相違は殆ど認められなかった。今回の分析では、A 優位型と平坦型 I (高水準) との間で、「影響受けやすさ」、「対人協調」で相違があるのみである。

従って、ここで測定した自立性尺度によっては、自立類型と考えられるものの間の相違を確認することは出来なかった。

以上の関係性の比較により、大学生の自立・自律型類型として想定した、平坦型 II - 中を除く NP 優位型、A 優位型、FC 優位型、M 型、平坦型 I - 高、の 5 類型は、自立性尺度の 7 自立因子と、今述べた関係が見られたことから、検討課題は残るものの、自立・自律型エゴグラムについて自立性因子が示すどの側面を持つ自立性であるか、つまりどの様な様相を示す自立性であるかが、明らかとなった。

V 全体的考察

我々は、自立性を 7 つの側面で成り立つ心理的状态と仮定し、その中心的な心性は個性的に自分らしく生きる「独自性」であり、且つ、他 (社会) と適切な関係性を保ちながら、自己を保てない程に頑張ることなく持続した人生を生きることを可能にする、適切な「依存性」をも兼ね備えた特性と考えてきた。TEG のセルフ・コントロール (自律性) も、個性のある自分を自分らしく、他との関係を適切に保ちながら生きる自我状態を追求する理論であることから、これらの特性間の関係を通して、青年の自立・自律型の様相を明らかにしたいと考えた。

ここで得られた結果については、先に述べた通りであるが、次の点で我々の想定と必ずしも一致しなかった。

一つ目は、ここで想定した 6 つの自立・自律型類型については、それぞれに特徴があり同じ型ではないにも関わらず、我々の自立性尺度では、類型間でその相違を確認することができなかった。この理由として考えられることは、例えば、これらの自立性類型が自立性傾向に関して相違がない可能性、或いは、何らかの自立性傾向の差が存在

するが、その自立傾向を示す因子(下位領域)を我々の自立性尺度で測定していない可能性である。今後、TEG 類型についての更なる考察と自立性因子の更なる吟味が必要であり、青年たちの心性について、より注意深い検討を重ねる必要がある。

二つ目は、我々の想定と結果が異なった各類型についてである。

この内、逆N型II-FC・NPについては既に述べたが、平坦型II-中が、どの自立因子とも全く関係性を示していないことについては以下のように考えている。先に想定した段階では、緩やかな山型に準ずるM型(成長・発達と共に「A」が高くなれば山型になる)と同じように、この型もデュセイの言う望ましい自立・自律型ではないが、青年、特に学生には、デュセイの言う平坦型I-高のパターンは表れにくいと考え、これに準ずるパターンとして、平坦型II-中を自立・自律型と想定した。しかし、平坦型II-中の自我状態の低さは、全てにおいて、活気のない傾向であり、平坦型I-高に向かうパターンと想定することが適切でなかったとも考えられ、このパターンは非自立・非自律型と考えるべきなのかもしれない。

三つ目は、大人の自立・自律型である、緩やかな山型に成長していく可能性が大きいと考えたM型について、想定したような自立因子との関わりは認められず、認められたのは「対人協調」のみとの関係性であり、山型に向かうであろう、と考えることは可能と思われるが、M型の示す自立性が「対人協調」のみであるのは何故であろうか。

M型は、NPとFCの自我状態が高く、成長につれてAが高くなれば、デュセイの言う「望ましい緩やかな山型を示す、望ましい自立・自律型の予備軍ともいえる類型であると考えている。「対人協調」因子以外、関係性が示されなかった要因として、自立・自律型としては不完全であり、「A」が高くなるのを待つ必要があることが推測される。先に述べたように対人協調が高いこと、自我状態からは、心の元気指数である「FC」が高いことから、想定が間違っていたとは考えていない。論理的、客観的に判断する「A」が高くなれば、あくまでも推測であるが、ここでA優位

型が示しているような自立因子との関係性に他の2因子を加えて7因子全てとの関係性が認められることが期待され、成長後の山型への変化が待たれる類型である。

四つ目として、自立性の側面に「適切な依存性」を考えているが、今回、適切な依存性に反する甘えの依存性に関わる項目を入れていないため、甘えと適切な依存性を識別できていない。依存性に関しては、結果を出すのが難しい課題でもあり、その測定には、さらなる吟味が必要であると考えている。

本研究で独自に自立・自律型と想定したFC優位型については、「FC」の自我状態が、感情や欲求を自由に表現する自己肯定感の構えをもっていることに注目しつつ想定した。分析結果では、人の影響を受けることは少なく、独自性が高い傾向を示しており、想定した内容を反映している。ただし先に述べたようにFCは、未成熟な幼児性として、わがまま、腰の軽さと風評される傾向もあり、青年の自立・自律型とするには課題も残されている。にもかかわらず青年の自立・自律型と想定した主な理由の一つに、自由奔放なFCが心の元気を支えるエネルギーとされていることが挙げられる。青年、特にここで対象として大学生の環境は、社会に対する責任を負う程度は低く、経済的にも親への依存が他ともに許されている環境とも考えられる。言い換えれば、自立して生きている大人が出会う様々な問題にまだ遭遇していないため、「A」が低いことによる現実認知が弱いとしても問題として捉える必要がなく、明るく元気に生きていることが推測される。楽しい心のエネルギーが高いFC優位型の学生は、問題に遭遇したとき、その楽しいエネルギーの高さが問題を乗り越えることを可能にするであろう。更に問題を乗り越え、解決することで、「A」が高くなることも期待され、「FC」と「A」の相乗効果で二つの自我状態が高まり自立・自律に向かうのではないかと考えている。この推測に基づき、エネルギーの高い元気な心性は「FC」が高いことに起因すると言われていることから、「A」の自我状態が関わる「将来展望」「自立の認識」が低くても、「FC」が高い、心が元気である類型をM型と同様、大人の自立・自律型予備軍とした。

M型とFC優位型は、自立・自律型とするには、未熟であるパターンであるが、青年の自立性の想定に、未熟さを加味した類型である。青年の自立性を考える場合に青年の未熟性をどのように構築するかが今後の課題である。

ここまで自立・自律類型のみについて述べてきたが、非自立・非自律類型と想定した類型について、関係性が示されたものは、AC優位型、FC低位型、N型Ⅱ-NP・FC、N型Ⅲ-A・FCであった。AC優位型については人から影響を受けやすく、独自性が弱く、感情統制ができない、想定どおりの非自立・自律型が示された。他の類型については、AC優位型ほど顕著な結果ではないが、今後は、非自立・非自律類型と自立性因子との関わりも考慮し、自立性尺度の検討をすることにより、尺度の精度を上げていきたい。

現代青年、特に大学生の自立・自律型エゴグラムを考える場合、「A」のエネルギーの高い者は少ないと予想し、5つの自我状態が平均的に高くその機能を果たしている大学生も多くはないと予想していたが、集約数が少ないという結果は予想通りであった。大人として成熟している大学生は多くはないと思われることから、青年の自立・自律型を、まだ大人としての成熟に達していない、成長・発達の可能性を大きくもっているものとして想定したが、いくつかの課題を残しつつ、自立因子との関係性においてはほぼ、期待した結果が得られたと考えている。

毎日学生と接している現場からの印象も通して、未熟で未発達な幼稚性を示す者、やる気の無い、エネルギーの低い者、AC優位型の者が多く、元気な心性を示す学生数は少ないであろうとした推測はおおよそ、その通りであった。但し、自立・自律型であるNP優位型、FC優位型、M型

については同じような比率で存在し、それぞれに特徴をもった自立性をもつ青年達が平均化して存在していることが明らかになった。今回の調査を通して、青年のもつ自立性は、大人の考える自立性とは多少の違いはあるにしても時代と環境に合わせて発達し、それなりに逞しく生きている青年達の姿も明らかになった。青年期のひ弱さのようなものが取りざたされることも多いが、成長・発達と共に、大人の自立・自律型になると思われる元気な心性の学生も相当数おり、彼らが担う次世代に期待したい。

青年の自立性とエゴグラムの関係については、今後、調査を繰り返すと共に、自立性尺度の精度も上げ、若者が自分の自立性の様相を知り、力強く元気にセルフ・コントロールを果たしつつ働き生きることにつながる研究を継続したいと考えている。

謝辞

本研究は、北陸学院大学における他大学教員との共同研究補助金を得て実施されたものである。

<文献>

- 菱田陽子・加藤礼子・金子劬榮 2010 「現代青年の自立性に関する研究：自立性尺度作成の試み」『北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要』第2号 第1分冊
- ジョン・M・デュセイ 1980 『エゴグラム』池見西次郎監修 新里里春訳 創元社
- 東京大学医学部診療内科 TEG 研究会編 2002a 『新版 TEG 解説とエゴグラム・パターン』金子書房
- 東京大学医学部診療内科 TEG 研究会編 2002b 『新版 TEG 活用事例集』金子書房
- 東京大学医学部診療内科 TEG 研究会編 2006 『新版 TEG II 解説とエゴグラム・パターン』金子書房
- 新版 TEG II